カラー版

ビリーと雄牛

ディヤング作　白木　茂訳

旺文社ジュニア図書館

N. D. C. 933　ディヤング

ビリーと雄牛

ディヤング作　白木茂訳
旺文社　昭和45(1970)
240P　さし絵 23cm(旺文社ジュニア図書館)

(旺文社ジュニア図書館)

ビリーと雄牛

定価 450円

昭和45年2月20日　初版発行
昭和45年5月10日　重版発行

訳者　白木茂
発行者　根本峰好
印刷所　株式会社美松堂印刷所
　　清水印刷紙工株式会社
製本所　株式会社市川製本所

発行所　株式会社旺文社
162東京都新宿区横寺町
電話 東京(03)267－1111〔代〕

Obunsha

501086

©白木　茂1970
(許可なしに転載，複製することを禁じます)

8397 692-20 0724

落丁・乱丁・不良本はおとりかえします
書店または本社に直接お申し出ください

旺文社ジュニア図書館

ビリーと雄牛

ディヤング作　白木　茂訳

〈編集委員〉

五十音順

白木　茂（日本児童文芸家協会常任理事）

滑川道夫（東京教育大学講師・日本児童文学学会常任理事）

波多野勤子（日本児童研究所長・文学博士）

福田清人（立教大学教授・日本児童文芸家協会理事長）

山室　静（日本女子大学教授・日本児童文学学会常務理事）

もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

読むまえに……8
第1章　年より牛と男の子……9
第2章　わるいおこない……23
第3章　いちばん親切なこと……36
第4章　自転車……52
第5章　かわいそうな牛……74
第6章　大吹雪……88
第7章　とじこめられる……101
第8章　なかやすみ……115
第9章　大きな男の人……127
第10章　もう安心……146
第11章　食料がなくなる……157
第12章　たいへんな一日……175
第13章　おいしげる草……195

かいせつ

まとめ……209
作者について……211
『ビリーと雄牛』について……217
ディヤング年表……218

父母・先生がた・研究者のページ

作者と作品……221
わたくしの児童文学　ディヤング鑑賞指導……232
これからの読書指導……234
訳者あとがき……235

絵・小林与志……236

読むまえに

この物語をかいた人は、みなさんには、きっとなじみのない名まえだと思いますが、現在のアメリカの代表的児童文学作家であるばかりでなく、国際アンデルセン大賞という、世界じゅうの児童文学作家にとって最高の名誉とされる賞まであたえられた人です。

……町から、さびしい村にひっこしてきたビリーは、友だちもないままに、かわいそうな年より牛に同情し、いつのまにか、すっかりなかよしになってしまいます。そして、とつぜんビリーの住んでいる村が、おそろしい吹雪におそわれました。おとうさんは町の事務所に出かけたまま、帰ってこられません。おかあさんとビリーのふたりだけの心細い大雪の中の生活に、思いがけない事件がもちあがりました。おかあさんが、足を折ってうごけなくなってしまったのです。ひとりぼっちのビリーは、どうしたらいいでしょう。年より牛が大雪の中をやってきてくれましたが、さてそれから……。

第1章

年より牛と男の子

年とった雄牛が、牛小屋の中につっ立っていた。大きな頭をたれ、かすんだ目でつめたい、からっぽのまぐさ桶を、じっと見つめていた。

雪が——ひっきりなしに降る白い雪が、牛小屋の中いちめんにつもっていた。たわんでいる半びらきのドアのところから吹きこんでくる雪は、吹きだまりになっている。牛がつっ立っている場所だけに雪がない。牛の立っている床が、洗い流したように雪もわらもないのは——ぬれてよごれた寝わらまで、たべてしまったせいである。いま牛はうなだれ、からっぽのまぐさ桶を、じっと見つめていた。

ふいに、合図か鐘の音でも聞いたように、牛は頭をあげると、仕切り棒にはまっている、やせた首をまげた。

そうやって、仕切り棒から、つのを一ぽんはずした。牛は、ゆっくり、もう一ぽんのつのもはずそうとした。くちかけている仕切り棒から、木がきしんでぬけおち、とうとう、つのがはずれた。年より牛は、自由になったのだ。

牛はあとずさりして牛小屋から出てきたが、あいている戸口のところで、からだ半分を小屋の中、半分をそとに出したまま、立ちどまった。

雪にぎらぎら反射する日光に目をまぶしそうにほそめながら、年より牛は丘の上の家を見あげた。それから、どっしりした頭のむきをかえると、丘の下の雪野原を、なにかさがすようすをして見まもった。きゅうに、年より牛はうなった。興奮のあまり、牛は、足もとの雪をなめた。

いちどは丘をゆるがさんばかりの声でほえようとでもするように、頭をぐいとあげてみたが、すぐに力なくたれてしまった。牛の目は雪野原のはるかむこうにうごいている黒点に、じっとそそがれている。

その黒点は、どんどん近づいてくると、ちゃんとした形になった。ひとりの男の子だった。男の子は、ふかい雪に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

足をとられながらも、すすんでくる。大きなボール箱をのせたそりをひっぱっている。箱はおもそうだ。少年は、からだを二つにおるようにして、そりをひきながら丘のほうへやってくる。

戸口のところで、年より牛は身うごき一つせずに、まっていた。

男の子が、丘の下にさしかかったとき、ふいに牛はとぎれとぎれの声でないた。男の子は、立ちどまって、どもりながらいった。

「おやっ、おまえはぬけだしたんだね」

男の子が立ちどまったので、牛はしんぼうしきれなくなった。まっしぐらに走っていったが、どうにか、あいてをよけると、そりにのっている箱に突進した。

牛は、箱に首をつっこんだ。男の子はかけよって、むさぼりたべる年より牛のようすを見まもった。男の子の頭と牛の頭がならんだ。

丘の上の家では、勝手口のドアがしずかにしまり、おじいさんが、そうっと大またで丘をおりてくると、音もたてずに、牛小屋のかどをまがっていきなりあらわれた。

「いったい、おまえは、この牛になにをしているんだ！」

男の子は、とびあがった。

「さっさと行ってしまえっ！」

男の子はむちゅうで、そりをつかんだが、年より牛はたべるのにむちゅうで頭をあげようともせず、箱とそりをおさえつけている。男の子はもう一ど、おびえたような目でおじいさんのほうを見てから、そりをおいてきぼりにしたまま、にげていってしまった。

おじいさんは、いそいで牛のそばへよっていった。

うしろの丘の上の家からおばあさんが出てきた。手をかざして、まぶしい日光をさけな

がら、にげていく男の子のすがたを目にすると、手を口にあててさけんだ。

「ビリー……ビリー！」

男の子はふりかえりもせず、いっそうはやく走っていく。おばあさんは手をおろすと、だまって、おじいさんのほうへ歩きだした。おじいさんは、箱から、年より牛の頭をひきだそうとしている。

「さあ、頭をどけるんだ。なにがはいってるか見なければならんからな」

おじいさんは、肩で牛をおした。牛は、腰のほうはうごかしたが、頭は、あいかわらず箱につっこんだまま、たべつづけて

いる。

年より牛は、ようやくおされたり、どなられたりしているのに気がついたらしく、頭をあげると、ぼんやりおじいさんをながめた。それから箱のふちをくわえ、かしいだまま箱をたかだかともちあげると、歩きだした。箱から、中のものがこぼれおちた。おじいさんは、目をまるくして、大きなにんじんをおばあさんにさしだすと、

「なんてえこった。わしの牛ににんじんをもってきてくれるとはなあ。おかげで、あのおいぼれめも元気がつくことだろうて」

おばあさんは、おじいさんを見つめると、

「まあ！　はずかしくはないんですかあんたの飢えている牛にたべさせようと、小さな子が、母親の貯蔵している野菜をぬすんでくるのをよろこぶなんて！」

おじいさんは、丘の下で、さいごの切れはしをさがして、箱のすみに鼻をつっこんでいる年より牛をじっとながめながら、頭をふった。

「あの子は、この年より牛がすきなのにちがいないな」

おじいさんは、なんとなくうれしくなったように、おばあさんに聞いてみた。

「あの子を知ってるのかね？」

おばあさんは、うなずいた。

「知ってますとも、あの子は、つぎの道路ぎわの三十エーカー（約一万二千平方メートル）の土地の、あたらしい家にひっこしてきた町の人の子どもです。そら――いつか話した、あの三十エーカーの土地に木をうえたいという人ですよ。あの人たちの地所は、このうしろなんです」

おばあさんは、男の子がにげていった畑のほうをながめると、

「あの子は、いい子だわ」

と、ひとりごとでもいうようにいった。

「あの子のしていることを、あの子の母親にいわなくちゃならないわ。けれど、あの子にすれば、あの年より牛が飢えているのを見ていられなくてしたことなんだわね」

おばあさんは、おじいさんのほうにむきなおると、

「まあ！　上着もきないで、こんなそとに出ているなん

て。肺炎になって死んでしまいたいんですか。あなた、家の中へおはいりなさい」

「だが、牛はどうするね」

「心配はいりませんよ。あんたの牛はにげだしたりはしませんからね——おなかがすいて死にそうになってるんですもの、にげられやしませんとも。あの子に、そりをかえしてきてから、わたしが牛の世話をします。とにかくショールをはおらなけりゃ」

おじいさんとおばあさんが丘をのぼっていくのを、年より牛はこっそり見まもっていたが、ふたりが家にはいってしまうがはやいか、用心ぶかく牛小屋へもどった。だが、からになった箱は、まだちゃんとくわえていた。

まもなく、おばあさんは頭からショールをかぶって家から出てくると、もといくつもあった納屋の地下室だったにちがいないふかい穴のへりをつたいながら、丘の斜面をおりていった。雪でなかばうまっている、その穴からは、大火事でくずれおちた黒こげの材木が、いくつもころがっているのが見えた。

おばあさんは、ふと牛小屋のほうを見た。年より牛は、牛小屋の入口に、ちゃんともどっていた。かた足をボール箱につっこみ、箱のかたがわを引きさいて、字のかいてある大きな切れはしをもぐもぐかんでいる。年より牛は、おばあさんを見ると、かむのをやめ、まじめくさっておばあさんをながめた。口のはしからボール箱のながい切れはしがぶらさがっていて、それには『スープ』とかいてあった。

「ああ、なんてことだろう！」

と、おばあさんはおこったようにいった。

「ああ、なんてことだろう——紙までたべるしまつなんだから！」

おばあさんは、いそいで顔をそむけた。

からのそりをひっぱりながら、おばあさんは男の子が雪の中につけた、いりみだれている小さなくつあとのついている道をたどっていった。さくとさくのあいだに、ひっそりとならんでいる、いく段もの畑のあいだを、おばあさんは、せっせと歩いていった。

やがて、雪にうずもれたある畑のかどまできたとき、お

ばあさんは、あたりをめずらしそうに見まわした。そこだけが、ほかとちがっていた。そこではかん木がうねりくねってならび、黒い頭を雪の下から出している。かん木のむこうには、まだ小さな木がいく列もいく列もほそながい土地にならんで、はえていた。このほっそりした灰色の木木を、おばあさんは、じっとながめていた。

すると、男の子は近くの茂みのかげから、そっとあらわれて、おばあさんの前へぱっととび出してきた。おばあさんはびっくりして、やせた肩を、思わずうしろにひいた。

「わーっ！　おどろいたわ！」

それから、おばあさんはわらっていった。

「かくれてたのね。おじいさんに、命からがらの思いをさせられたんでしょう。けれど、それというのもやましい気持ちがあるからですよ――おかあさんの野菜をどろぼうしたりして！　おかあさんに話さなくてはならないわ。そう、ぜひとも話してきますよ、ビリー」

男の子は、ビリーという名まえだった。

こんなおどし文句も、そのビリーの耳には、はいらなかった。

「あれ、たべたかしら。あの人は――あのおじいさんは、ぼくがもってったえさをたべさせてくれたかしら？」

「一かけらものこさずね。おじいさんは、あんたをいい子だとほめてますよ。あんなふうにして追っぱらったのは、ほんとうにわるかったと後悔してますよ。でもね、おじいさんにすれば、あんたがなにかたちのわるいいたずらをしようとしてると思ったんですよ――あの年より牛をそとに出したりして」

「ああ、ぼくは牛をそとに出したりはしないよ……」

とつぜん、ビリーは、おばあさんの前でぴょんぴょんとびはねながら、

「あのね、ひょっと思いついたんだけど――ぼくが、なにかもっていってもいいとおじいさんがいうんなら……そんなら、毎日、あの牛にえさをやりにいってもいいはずだぞ。だって、おばあさんもほんとうは、いやじゃないんでしょう？」

「いやですね、ビリー。あんたに二、三かいえさをはこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com